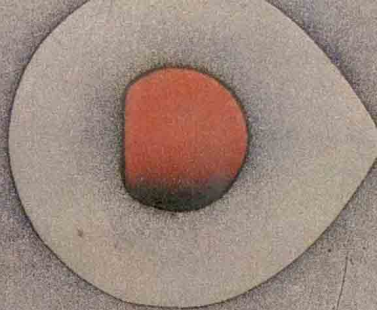


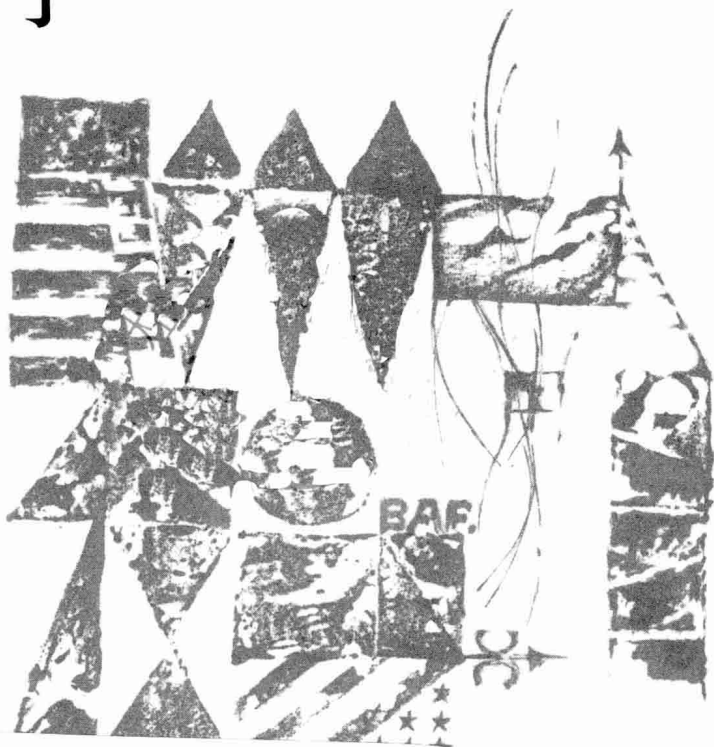
森
禮子

モッキンダバードのいる町



森
禮子

モッキンバードのいる町



新潮社版

モツキングバードのいる町

著者 森 禮子（もりれいこ）

昭和五十五年二月七日発行

昭和五十五年八月五日十一刷

発行者 佐藤亮一

印刷所 二光印刷株式会社 製本所 新宿加藤製本

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一一一 編集〇三(266)五四一一

定価 七八〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

モツキングバードのいる町 5

離島狂騒曲 85

遊園地暮景 139

風を捉える 167

あとがき 193

装画
天野邦弘

モ
ッ
キ
ン
グ
バ
ー
ド
の
い
る
町

モ
ッ
キ
ン
グ
バ
ー
ド
の
い
る
町

小馬の走路は

ただひとつの道

——アメリカ・インディアン
の諺——

1

天井裏でエアコンデションが、低く唸りつづけていた。家中でその音だけが生きているものようだった。戸外の広い住宅地も、連日華氏百二十度を越す暑熱に音を吸い取られて、ひっそりしていた。

だしぬけに電話のベルが侵入して来た。日中もブラインドを閉ざした仄暗い寝室の床にビニールクロスをひろげ、用具を取り散らして壁紙の張り替えに熱中していた圭子は、急に眠りから醒めたように顔を上げ、背後を振り返った。

アメリカ南部風のがつしりした檜材のダブルベッドと白い化粧台との間の薄暗がり、ダイヤル盤の灯りを小さな花輪のように泛べた淡緑色の電話機が、単調にベルの音を断続させている。見返ったまま、圭子は迷惑げに眺めていたが、ふと確信を失った眼色になった。スウではなく、テキサスに行っている夫のシェフからかも知れない……。

糊刷毛のりを持ったまま慌てて立って行き、左手で受話器を取った。

——ケイ、あたしなんだけど……。狎なれ狎なれしいべったりした声音の日本語が、受話器の奥か

ら絡みついて来た。

圭子は露骨にうんざりした表情を泛べ、未練げにやりかけの仕事の方へ眼を投げたが、声だけは愛想よい冗談めかした調子で答えた。相も変りませず……のスウね。

いっそう狎れあうふうの、けたたましい笑い声が返って来た。

反射的に圭子は、受話器を耳から離した。ぐちゃつとした濡れ雑巾か何かを膚に押しつけられた感じがした。

——ねえ、ケイ。聞いてよ、ちょっと……。離れたままの受話器からの遠い声が云った。

圭子は心の中で溜息をつき、傍の化粧椅子に腰を下した。答えようと答えまいと、いつも同じその言葉を皮切りに、自分の感情以外は目もくれないスウの長電話がはじまるのだ。しかも話ばかりきまっつて、退役将校でアル中気味の夫の悪口か、更年期過ぎてからはじまった若い男相手の情事の——スウ自身は恋愛と云っているが——相談めかした惚け話なのだ。ごく稀に用事らしきものがないではないが、用件に辿り着くまでに必ずきまっつた線路を走って、更にくどくどしい用件の前置きが加わり、小一時間はかかる。今度スウから電話がかかって来たら、日本人同士という血の狎れあい嫌いだ、他人の色事にも自分は興味がないときっぱり断ろうと、もう何年も圭子は思いつづけている。

——もうあたし、我慢出来ないわ。昨夜あたし、フィルのお蔭で一睡も出来なかったのよ……何の役にも立たない本なんぞ読み耽つて……夜中過ぎてやつとベッドルームに……当てつけがましくわざと大きな音をたてて……たかが枕カバーくらいのこと……日本の捕虜収容所じゃ破れ毛

布一枚の生活を……徹底したエゴイスト……

エンドレステープさながらのスウの声を切れぎれに聞きながら、圭子は眼だけ逃れるように壁にやり、三分の一ほど張り上げた生漉^{きす}き和紙の出来工合を眺めた。

今年の春、定年で軍隊を退役した夫のシェフは、ひと月ばかり前からテキサス州南部の従弟の農場に農繁期の手伝いに行っていた。娘と息子の二人の子供は去年の秋、不意に渡りの季節が来た鳥のようにそれぞれ独り立ちして遠くへ行き、下士官ながら三十年あまり軍隊を勤めあげた夫の終身恩給だけで生活の心配はなかった。更に現役軍人家族と同様に陸軍病院や軍隊の保給購買^{コミザイ}部などを利用出来る退役軍人恩典もあり、州で最大の陸軍ミサイル基地に隣接しているこの町に住んでさえいれば、医療費の心配はまったくなく、食料品なども安く購入出来た。しかし、アイランド系移民の三代目で勤勉な夫のシェフは、狩猟や釣りなどの趣味だけで日を送るのは落着けぬらしく、といって広大な草原地帯にとり囲まれた人口三万の田舎町では適当な再就職口もなく、従弟から招かれたのを幸いにアルバイトを兼ねてテキサスへ出かけたのだった。

まだ水気を帯びて黴^{くさ}んでいる壁の和紙は、まるでティッシュペーパーを張ったように頼りなく、見窄^{みせま}しく見えた。扱いも思っていたより難しく、障子張りの要領を思い出しながら、壁に薄糊をひいて手早く張ったが、それでも紙が伸びて、かなり目立つ小皺があちこちに出来ていた。やはり、町で売っている糊つきの簡便な壁紙にした方が無難だった……と、圭子は後悔した。夫が帰宅した時に愕^{おどろ}かせようと寝室の壁紙の張り替えを思い立ち、町のスーパーストアを何軒も廻って気に入る壁紙を探した揚句、日本の生漉き和紙を使ったら……と思いついて、白人の女達には真

似られないアイディアだとひどく得意になった。だが、アメリカ南部風の頑丈な家具とうまく調和するだろうかと不安も覚えて何日も思い迷った揚句、諦めきれずにロスアンゼルス^{ロサンゼルス}の日本百貨店に注文して取り寄せたものの、記憶にあった以上の繊細な優美さに狼狽し、不安が募った。失敗だったらやり直すより仕方がないと、一刻も早く仕上げて出来工合を確めたい気持ちに急ぎ立てられていた。

が、受話器からは相変らず夫を非難しつづけるスウの声が流れ出ていた。言葉を挟む隙もない。圭子は心の中でふたたび溜息をつき、右手に持ったままの糊刷毛を親指と人差し指でつまんで眼の高さに吊るし、意味もなくぶらぶらさせた。日本人同士の血に甘えきっているスウを疎ましく思いつつ、それを許している自分にも苛ら立ちを覚えた。

スウと知り合ったのは二十数年前、生後八カ月の娘のフランスを抱いて夫とともに太平洋を越え、東海岸の夫の実家で半年ほど暮した後、大陸の中央部にあるこの町に來たばかりの頃だった。馴れない生活に加えて、聞きとり難い南部訛の言葉と、はじめての子育てに身も心も消耗しきっていた圭子は、基地内の保給購買部^{コメダ}で不意に日本語で声をかけられた時、暫く返事が出来なかった。お河童髪^{かっぱ}がよく似合う日本人形めいた、ほっそりとした容姿にも魅了された。たちまちその場で親しみを深め、圭子がこの町に來て日が浅く、車の運転も出来ないことを知るとスウは、子供のない身軽さで三日にあげず訪ねて來て、あれこれと世話を焼いた。横浜の貿易商の娘で、母親を早く失ったために甘やかされて育ったというスウは、自分の感情に溺れてしつこくなる癖はあったが気のいい人柄で、圭子も何かにつけてスウを頼りにし、スウと知りあったことを自分

が幸運に恵まれているしとさえ思った。基地内の陸軍病院でロバートを生んだ時も、まだよちよち歩きのフランシスを二週間も預ってくれたのはスウだった。

昔のことを思い出すと圭子は、ほとんど毎日、時間構わずかかって来るとはいえ、スウの長電話を迷惑がっている自分に、いくらか後ろめたさを覚えた。自分もかつては日本人の血に甘えて、苦境を助けてもらったのだった。

同時に、あれほど魅惑的だった愛らしいスウはどこへ行ってしまったのだろうと、訝しい気がした。今のスウにあるのは、どこか皮肉な匂いがする魔女めいた乾涸^{ひから}びた容姿と、ぎすぎすした身勝手さばかりだった。

——あたし、用があつて出けなきやならないんだけど……。やっとスウの声の隙をみつめて、圭子は早口に遮った。

受話器の奥で一瞬、不吉な沈黙があつた。どこへ行くのよ、と機嫌を悪くした声で訊ね返して来た。それだけは昔と変らないお河童髪の長い前髪の下から探るような硬い眼を覗かせ、薄い唇を不満気にぎゅっと結んだスウの顔つきが眼先に見えた。

——ジューンに、と咄嗟に圭子は嘘を重ねた。あのスウツケースを届けようと思つて。銀行に行くもあるし……。

——ああ、あのスウツケースね。

訳知りにスウは答えた。自分だけが知っている内証話に機嫌を直したらしく、不意に面倒見のよい年長の女の声になって、

——早く届けてやりなさいよ。ジューンはほんとに何も持っていないのよ。車もないんだし……。
気にかかってたんだけど、と圭子は言訳した。

——でも、なにしろもう七、八年前の代物でしょ。それにもともと目星い物が入っていないのよ。
良い物はアトキンス大尉が売り払うか、メキシコ女が自分の物にしたんじゃないかしら。ガレー
ジセルでも売れないような普段着とか、使いかけのこちこちになった化粧品とか、安物のプロ
ーチなんかばかり。おまけに、誰の目にもつかないようにガレージの屋根裏の物置の隅に隠して
おいたから、取り出すだけでも一仕事だし……。シェフが留守だから、かえって忙しいのよ、庭
の芝刈りから犬の世話までやらなきゃならないでしょ……。

思いつくままに圭子は、言訳を並べ立てた。日本人同士なのにジューンに冷淡だと蔭口をきか
れたくない用心もあったが、アトキンス大尉から無理に預けられたのを迷惑に思いつづけていた
スーツケースを、何故ジューンに届けるのを一日延ばしにしているのか、自分でも理由がはつき
りしなかった。さまざまな言訳をつづけながら、確かにその通りに違いないと思う一方、なんと
なく本当の理由ではない感じがした。七年ぶりでジューンと顔をあわせるのが億劫なのかも知
れないと考えたが、それも確かにそうでもあれば、そうでない気もした。

——よかったわ、ちょうど……。

当惑めいた圭子の気持とは関わりなく、スウの声はふたたび一方的な調子になった。

——じゃあ、行きがけに寄ってよ。彼にちよつと用があるんだけど、あたしの車、エアコンディ
ションの調子が悪くて修理に出してるのよ。

圭子は答えず、壁に眼をやった。苛ら立たしげに暫く迷わせていたが、不意に決心して息を吸い、

——よしたほうがいいわ、と素っ気なく云った。彼はもう、あなたと手を切りたがってるのよ。かすかに怯んだ気配がした。が、すぐ、憤った声^{こゝろ}が熱っぽく押し返して来た。どうしてそんなことが分るのよ。あなたはエドガーを知らないじゃないの。エドガーは……エドガーは……エドガーは……エドガーは……

余計なことを云った、と圭子は後悔した。またしても受話器を耳から離して聞き流すより仕方のない、手放しの惚け話のきっかけを与えたようなものだった。スウは氣違^{クレイイ}いだわ、と忌々しく心の中で呟いた。他人の迷惑がまるで見えない、だから次つぎに相手の若い男に逃げられるのだということが、何度も同じ事を繰返しながらどうして解らないのだろう。いや、それよりも自分の容姿の衰えに氣ついていないのだろうか。まだ若い男を惹きつける魅力があると思っっているのだろうか……。反射的に圭子は、町で時折見かけるエドガー・スミスという名の、白人との混血インディアン^{インディアン}の青年を思い浮かべた。町のYMCAの美術教師をしている無名画家のその青年は、大地から真っ直ぐ生えた樹のような躰つきで、同じ蒙古系民族のせいか膚色も髪の色も顔だちも日本人そっくりだったが、眼の色だけが青く、義眼めいた不気味さがあつた。町から三十マイルほど離れた鹿^{エルク}の森と呼ばれるインディアン保留区^{リザーベ}の首長の一族とかで、様子にどこか肩を怒らせているような傲慢な構えが見え、しかし白人の若い娘たちに人気があるらしく、何人もの娘たちと派手やかに連れ立っていることが多かった。

その彼が、どんな心の迷いでスウと関係を持ったのか訝しかったが、いずれにしてもスウの惚け話から自己陶酔的なひとりよがりの癖を差引くと、彼がいろんな口実を設けてスウを避けはじめていることは圭子にも透けて見えていた。にもかかわらず、頑固に気づこうとしないスウが、真暗な狭い部屋に閉じ籠っている感じがした。

——あたしの思い違いだわ、きつと。

雪崩のようなスウの声がようやく一段落したのにはっとして、素早く圭子は折れて出た。とにかく、一刻も早く仕事に戻りたかった。ましてこの陽盛りに、熱くシートが灼けている車を運転してスウの購^{おび}曳きの手伝いをする気にはなれなかった。

——でもね、いい加減で別れた方がいいんじゃないの。もし人の噂にでもなったら……。

——噂なんて！ 焦れたように高飛車にスウは切り返して来た。そんなこと気にするのは偽善者^{ヒョウゼンシャ}がすることよ。莫迦^{ばか}莫迦しいわ。それで自分の人生を取り逃してしまうなんて。いずれは誰も死ぬんだわ。

——平凡な生き方があたしは好きなの。それに知ってるでしょう、ジェフが真面目人間^{マクモウニヤウ}だってこと……。

——何の関係があるの、それが。

——だって……困るわ。

——ああ、ジェフに知れたらってこと？……わかったわ、いいわよ。頼まないわ、そんな友達甲斐がない人には。二言目にはジェフがジェフがって、あなたって夫の顔色を窺って小心翼翼と生